

メディア教材を利用した授業への省察

古荘 智子(愛知大学名古屋校舎 語学教育研究室)

要旨

本小論は、2011年度春学期に担当した英語再履修クラスにおいて、映像メディア教材(English Central)¹⁾を補助教材として取り入れた授業に関する省察である。再履修クラスは、学部学科や年齢など英語力以外の学習者要因に幅があり、授業運営が非常に難しいとされている。今回は、メディア教材の利点を生かし、学習者のレベルや好みに合った教材を提供することにより授業の活性化を図った。また、英語学習への内発的動機を高め、自律的な英語学習者へと導くためには、どのような指導を行うべきかを検討し、今後の方向性を考察する。

キーワード：メディア教育、映像メディア、英語学習、再履修、モチベーション

1. はじめに

2011年8月に開催された外国語教育メディア学会(LET)第51回全国研究大会のテーマは「外国語学習での自律性と継続性」²⁾であった。シンポジウムでは、「映像メディアは英語学習の自律性・継続性を実現するか」という共通テーマのもと、小学校から大学まで、各レベルに適した映画の活用法や指導方法に関する具体的な内容から、映像メディア研究や実践における問題点や今後の方向性を理論面からとらえた発表など、多角的な視点から議論がなされ、映像メディアを使用する授業実践者にとって、多くの示唆を与えられた。本小論では、2011年度春学期に担当した授業の中で、映像メディアを利用した授業を振り返り、問題点を検討し

たい。

2. 授業実践

2.1 再履修クラスの特徴

再履修クラスでは、対象となる学生の学年や学部にも多様性があることは勿論、英語のレベルにおいても初心者レベルから留学経験者に至るまで多様であった(例えば、Vocabulary Levels Test³⁾ 2000 word-levelで最低点8点、最高点30点/30点満点)。このことから、再履修クラスを受講するに至った原因が、一概に英語の力が不十分であったことに起因するのではなく、授業出席に対するモチベーションの低さや体調不良、或は留学などによる長期欠席などといった、

英語力以外の理由に拠る場合も多いことが明らかになった。一方で、受講生に共通していると思われる点は、単位取得へのモチベーションが非常に高いことである。ただし、単位取得へのモチベーションは、英語の授業に対する期待度や、英語力向上に対する学習意欲とは必ずしも一致するものではない。しかしながら、単位取得という1つの目標に対する動機づけを生かして、その目標が達成された後、将来的にはTOEICや英会話力の向上など、それぞれの目的に合わせて、英語を自ら学習できるような自律的学習者へと意識の変容を促すことは可能であろう。

2.2 授業運営にあたっての問題点と映像メディア利用の目的

英語力やその他の学習者要因が多種多様な受講生を対象に授業を運営する教員にとって、最大の問題は教材の選択である。全ての学習者の興味関心をかきたて、レベル面でも満足のいくテキストを選択することは非常に難しい。このような問題に対し、Web上から無料で利用可能な、EFL/ESL用英語学習サイトの1つであるEnglish Centralを授業の補助教材として取り入れることにより、学習者の英語力と学習速度に沿って、実質的な英語基礎力の向上を図った。また、メディア教材は、従来の教師中心の授業とは異なった新しい英語学習の機会を提供すること

から、英語そのものに対する興味や関心を引き出し、学習意欲の向上につながることを期待した。もう1つの目的は、音読の指導に利用することであった。English Centralは映画やスピーチなどのビデオクリップを題材に、リスニング、スピーキング、発音矯正などの練習を学習者自身で行う自習学習用教材であるが、オーセンティックな英語を使った教材は、英語特有のリズムやイントネーション、音の脱落や同化などの現象を学習者自身の体験を通して理解させることが比較的容易である。それらをリーディングの音読指導に生かすことが狙いであった。なおEnglish Centralを取り入れた授業に関する先行研究は両部(2010)⁴⁾などがある。

2.3 方法

再履修クラスがリーディング主体の授業であること、そして情報処理教室の利用をシラバス作成後に許可されたため、今回はあくまでも授業のwarming upを兼ねた補助教材として利用した。利用時間は毎授業開始からの約20分間であった。受講者は入室すると、指定された座席と同じ番号のマイクを受け取り、サイトへの接続が完了した時点で練習を開始した。毎回の教材の種類やレベル、および量は受講者が自由に決定できる。タスク中、教員は机間を回り、機械の不具合や操作上のトラブル、学生からの質問な

どへの対応を行った。タスク終了後に報告書を記入させ、学習内容、スコア、問題点、気づいた点、前回より向上した点、質問など詳細を報告させた。回収した報告書に挙げられた問題点や質問は、翌週必ず全員に向けてフィードバックを行った。

2.4 結果および評価

今回の試みでは、学習の効果を測定するために統計的なデータの集積は行っていない。しかしながら、受講者の報告書の内容や最終授業時におけるアンケートの回答から、どの受講者もスコアの伸びを実感し、タスク実行に対する達成感を得ていることが示された。また、期末には、English Centralのビデオクリップの中から課題(レベルは「普通」)を1つ指定し、制限時間(15分)を設けてタスクを実行し、結果(スコア及び評価)を提出させた。それによると、受験者34名中、A⁺およびAグレードが全体の約50%、B⁺およびBグレード40%、C⁺およびCグレードが10%という結果が示された。

3. 考察

3.1 自己調整学習と3つの目標レベル

竹内(2011)⁵⁾は、(自律性の促進を指向する)これからの映像メディアの利用に関する研究・実践は、産物(効果)に至

るプロセス、及びそのプロセスを構成する下位プロセスやそれらの相互関係を説明できるような総合的なフレームワークを念頭に展開されるべきである、とし、Zimmerman(2001)⁶⁾らの「自己調整学習(Self-Regulated Learning)」の枠組みを取り入れた、外国語教育の理論的枠組みについて言及している。竹内は、その中で取りわけ「学習目標」の設定の重要性について触れている。目標には、マクロ(Macro)、メゾ(Mezzo)、ミクロ(Micro)の3つのレベルがあり(竹内 2010)⁷⁾、それぞれのレベルでの、明確かつ関連性のある目標が設定されなくては、学習者の主体的な関与を伴う学びは成り立たない、と主張している。本授業における目標をこの枠組みにあてはめて再検討してみたところ、学習者側と教員側には、それぞれの目標が考えられ、また両者の目標は、必ずしも一致しない部分があることが明らかになった。例えば、学習者側の視点から、ミクロレベルの目標として考えられるのは、「毎回の授業で決められた時間内に、出来るだけ高スコアでタスクを消化すること」であり、メゾレベルでは「前回より難しい課題に挑戦したり、よりよい成績を取れるよう努力したり、苦手な部分を克服することにより、一連のタスクを達成していくこと」であろう。これらの目標に関しては、教員側の目標とも一致する。しかし一方で、マクロレベルの目標に関しては、受講者側はおそ

らく「単位を取得すること」が最終目標であるのに対し、教員側は、「単位取得」は単なる通過点(Mezzoの目標に含まれると考えられる)に過ぎず、最終目標は、授業終了後も何らかの内発的動機によって、継続的に英語の学習を持続していくことができる自律的学習者へと受講者が成長していくことにある。

3.2 目標の達成と教員の役割

竹内(2010)は、学習に関わる個人要因として、指導やトレーニングにより、その性質が変容しにくいもの(年齢、性差、適性、学習スタイル)と教育的介入により比較的容易なもの(学習戦略、動機、メタ認知)に分けられると述べている。先に述べたように、本クラスの受講者は、英語学習あるいは授業出席自体に対する意欲の問題、授業や教員、そして他の受講者に対する不安や不満などを含む情動面すなわち、動機要因における問題を抱えているケースが多い。竹内(2010)によると、「動機」に関しての概念は単一ではなく、学習対象に関する興味や好感度、学習結果に対する期待感や満足感、学習過程に関するコントロール感や信念、学習者を取り巻く環境の切迫感、学習者自身の理想像など、様々な概念の集合体であるとし、「動機」は、様々な条件に影響され、常にその強さを変化させているという。とりわけ、自己決定

(self-determination: 学習の目標や過程、方法などを自らの意思で選びとること)の度合いが高いほど、内発的な動機づけ(intrinsic motivation)につながる傾向があること、また内発的動機づけの高さは、学習環境への働きかけや学習方法の工夫を介して、学習成果にまで影響することを示唆している。また動機要因の中で、自己効力感が低い学習者は挑戦を回避する傾向が強く、学習過程の場で挫折する傾向も認められるといい、教育的介入としては自己効力感の高揚に上手く働きかける(教員らによる)動機ストラテジーの使用が大切であることを指摘している。

概して、受講者の英語力がテキストや教材の難易度と一致し、その内容に興味や関心を持って学習に取り組むことができれば、「できない、分からない」と不安や嫌悪を抱くことが少なく、「できる」「楽しい」という自己効力感が増す。自己効力感とは肯定的な自己評価へとつながり、内発的動機を高めていくことが期待できる。再履修クラスの特性上、1人の教員ではカバーする事が難しい部分、即ち、様々な学習者要因をもつ学習者に適した教材の提供を、映像メディアによって補うことにより、学習を阻害する要因を排除し、促進すると思われる要因を積極的に取り入れることができよう。その部分において、今回の映像メディアを利用した授業は、ある程度、成功したといえる。

しかしながら、教員が最終目標に掲げた、受講者を「継続的に英語の学習を継続していくことができる学習者へと成長させる」ためには、更に積極的に動機づけストラテジーを取り入れた教育的介入を行うことにより、自律性を養い、動機づけを高める指導実践を行う必要がある。

Sinclair (2000)⁸⁾は、learner autonomyの特徴についてまとめている。それによると、autonomyは、1つの能力であり、学習者が自分の学習に責任を持つとする意欲であるが、それは必ずしも生まれつき備わっているものではない。(言い換えると)学習者を誰にも頼れない1人だけの状態にしておけばautonomyが育つということではなく、単にストラテジーを教えればよいということでもない。autonomyの育成には省察や意思決定を通じて学びの過程への意識的な気づきが必要である(2000:7-13)。つまり、学習者の真のautonomyを育成するには、指導者による適切な「足場かけ」(scaffolding)が必要不可欠であり、指導者は、学習者のautonomyのレベルに合わせて、きめ細かく足場を調整する必要がある(竹内 2010)。言い換えれば、一方的な「教え中心」の授業ではなく、現場の学習者に合わせて、指導方法を柔軟に調整する能力や、現場を洞察し、問題を発見し、解決していくことができる能力、つまり教員自身の自律性が求められている。

4. まとめ

再履修クラスの特徴は、英語力の問題も含め、様々な学習者要因を持つ学習者が集まっていることである。今回使用したEnglish Centralのような、情報メディア教材は、個々の学習者のレベルに適した教材を提供し、英語学習を阻害する心理的要因(苦痛や不安、不満など)を減らし、興味と関心を持ってタスクに集中できる環境を提供した。だがそれは、教員を「教え中心」の授業から解放し、映像メディアという便利なツールに任せてしまうという意味ではない。メディア教材を何のために利用し、それによってどのような効果を期待できるのか、明確な目標設定と学習効果を検証するアクション・リサーチを積み重ねていくことによって初めて、メディア教材を最大限有効に利用することができよう。今後ますます増えていくであろう便利で利用価値の高いメディア教材の利点を十分に生かして、学習効果の高い授業を行うためには、授業実践者側にメディア教材を使用する明確な目的意識と、継続的かつ自律的な研究や実践に研鑽を積み重ねていく努力が求められている。

文献

- 1) English Central:<http://www.englishcentral.com/>
- 2) 外国語教育メディア学会 第51回(2011年

- 度)全国研究大会(2011年8月6日～8日
於：名古屋学院大学 白鳥校舎).
- 3) Vocabulary Levels Test (VLT)
VLTは語彙レベルを出現頻度順に基づいて測定するためのテストである。語彙レベルとしては、ワード・ファミリーを単位として5つの語彙頻度レベル (2,000語, 3,000語, Academic語, 5,000語, 10,000語)がある。各レベルのテストは、6個の単語と3個の定義文から構成され、それぞれの定義文に対し、6単語の中から内容が一致するものを選択する形式で1 clusterが構成されている。各レベルは10 clusterからなり、30点満点で採点される。
- 4) 両部郁代：無料英語サイト「English Central」を利用した発音・会話練習と授業活性化の効果，第36回全国英語教育学会大阪研究大会発表予稿集，pp. 566-567 (2010)。
- 5) 竹内理：映像メディアは英語学習の自律性・継続性を実現するか：自己調整学習の観点から，外国語教育メディア学会第51回(2011年度)全国研究大会 発表論文集，pp.10-11 (2011)。
- 6) Zimmerman, B. J.: Theories of self-regulated learning and academic achievement. In B. J. Zimmerman & D. H. Schunk (Eds.) *Self-regulated learning and academic achievement--Theoretical perspectives* (2nd edition), pp.1-37, Mahwah, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, (2001).
- 7) 竹内理：学習者の研究から分かること---個別から統合へ(第1章) 小嶋英夫，尾関直子，廣森友人(編著)，成長する英語学習者---学習者要因と自律学習(英語教育学体系第6巻)，pp. 1-20，東京：大修館，(2010)。
- 8) Sinclair, B.: Learner autonomy---The next phase? In B. Sinclair, I. McGrath, & T. Lamb (Eds.) *Learner autonomy, teacher autonomy---Future directions*, pp.4-14, London: Longman, (2000).